

新潟地方気象台の3か月予報に基づく農作物等の管理対策（第7報）

令和2年9月30日
新潟県農林水産部

新潟地方気象台から9月25日に発表された「北陸地方 3か月予報」によると、10月の天気は数日の周期で変わり、気温は高い見込みです。11月は平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。12月は平年と同様に曇りや雨または雪の日が多く、気温は、平年並または低い見込みとなっています。

今後の天候の変化に十分留意し、下記の管理対策の徹底をお願いします。

また、日暮れが早くなり、手元・足元等が見えづらくなりますので、農作業事故に十分注意してください。

記

I 水稲

1 収穫・乾燥・調製（晩生品種等での留意点）

- (1) 刈り遅れは胴割粒の発生や穂発芽を助長するため、収穫時期を迎えたほ場はできる限り早めに収穫する。
- (2) 田面や路肩が柔らかいほ場では、収穫・運搬作業時の事故に十分注意する。
- (3) 胴割粒の発生を防止するため、倒伏等で屑米の混入が多い場合は乾燥時に水分18～20%で一旦停止し、半日程度貯留して水分ムラを解消した後、再乾燥する。
- (4) 未熟粒や着色粒・その他未熟粒が多い場合は、1.9mm以上の篩い目や色彩選別機で調製し、整粒歩合を高める。

2 稲わらやもみ殻の施用による土づくり

- (1) 稲わら及び籾殻の秋すき込みは、腐熟促進を図るため収穫後できるだけ早く、地温が高いうちにいき、10月中旬頃までに完了する。
- (2) すき込みの耕深は、稲わらと土壌を十分に混和させつつ、土壌微生物に対する酸素の供給、春先の土壌の乾燥促進などを考慮して、5～10cmの浅うちとする。湿田や冬期に湛水しやすい水田では排水溝を作り、表面水の排除に努める。

II 大豆

1 適期収穫

- (1) 黄葉期（ほ場内の着生葉の80～90%が黄化した時期で成熟期の約2週間前）頃からほ場ごとの登熟状況を確認し、早期に収穫作業計画を作成する。また、適期収穫に向け、乾燥・調製施設の荷受け体制を早期に整える。特に湿害や干害及び強風害を受けたほ場では、ほ場ごとに成熟の進みをよく確認する。
- (2) 強風や病害虫などによる葉の損傷や早期落葉で黄葉期を判断できない場合は、莢や茎の熟色、子実水分から成熟の進みを確認する。
- (3) 専用コンバインの収穫適期は、子実水分22%以下かつ茎水分60%以下が目安である。収穫の遅れに起因する亀甲しわ粒の発生を軽減するため、収穫適期を迎えたほ場から速やかに収穫する。
- (4) 汚損粒の発生を防止するため、収穫前に雑草や青立ち株を必ず抜き取る。特に、毒性雑草であるヨウシュヤマゴボウ、イヌホオズキの果実汁が付着した大豆は、農産物検査の対

象外となり流通できなくなるので、取り残さないよう注意する。

- (5) 倒伏した大豆をコンバイン収穫する場合、倒伏の状況に応じたリール位置や刈り取り高さに調節し、収穫ロスを減らすとともに土のかき込みを防ぐ。

2 乾燥・調製

- (1) 乾燥時に裂皮粒やしわ粒を発生させないため、子実水分が20%までは常温乾燥とし、子実水分が20%以下に下がったら加温する。送風温度は気温プラス10℃以下とし、30℃を超えないように注意する。
- (2) 調製は、大豆用粒選機、色彩選別機などを利用して丁寧に行い、被害粒や夾雑物の混入防止に努める。

III そば

1 収穫

- (1) 収穫期の判定は主茎先端の集合花房の黒化率（成熟して果皮が黒色になった子実の粒数割合）で行う。
- (2) コンバインによる収穫は、成熟期（黒化率70～80%）頃に行い、刈り遅れによる減収や風味の低下を防ぐ。
- (3) 成熟期頃は茎水分が高く、残葉も多いので、茎葉がつまらないよう刈取り速度を抑え、丁寧に収穫する。

2 乾燥・調製

- (1) 収穫後のそばは、品質が低下しないように速やかに乾燥を行う。過乾燥や水分過多では風味が低下するので、乾燥仕上げ水分は16.0%を最高限度とする。
- (2) そばは風味を落とさないように常温通風乾燥を行うが、加温乾燥を行う場合は穀温30℃を超えないように送風温度を設定する。平型静置式乾燥機では途中で攪拌し、乾燥の均一化を図る。
- (3) そばは収穫や乾燥の際に物理的な損傷を受けて剥皮や破砕が発生しやすいので、丁寧な調製を行う。

IV 大麦

1 は種

- (1) 越冬前に適正生育量を確保するため、少雪地帯（根雪日数60日未満）では9月25日から10月10日まで、中雪地帯（平年：根雪日数60～90日、多雪年：根雪日数90日以上）では9月20日から10月5日までには種する。
- (2) 出芽・苗立ちを安定させるため、70%以上を目標に碎土率を高める。転換畑での湿害防止や碎土率向上には、アップカッターロータリーを用いた畝立ては種が有効である。
- (3) ドリル播、全面全層播では、は種後～出芽前に土壌処理除草剤を散布し、越冬前から雑草防除を徹底する。

2 秋期追肥

苗立ち数が㎡当たり 150本に満たない場合や黄化が見られる場合は、有効茎の早期確保を図るため、は種2週間後に秋期追肥を行う。追肥には硫安等の速効性肥料を用いる。追肥量は窒素成分で10アール当たり 2 kg 程度とする。

V 野菜

1 施設野菜

- (1) 施設内の結露を防ぐため、天候に応じたこまめな換気や早めの保温など、適正な温湿度

管理を徹底し、草勢維持及び病害の発生防止を図る。

- (2) いちご「越後姫」の促成作型は、花芽を確認したのち適切な時期に定植する。また、苗からのうどんこ病やハダニ類の持ち込みに注意し、開花期までに重点的に防除する。

2 露地野菜

- (1) ねぎは葉鞘の太りと伸びを見て、収穫見込時期に合わせて土寄せ及び施肥管理を行う。収穫時に黄色斑紋病斑が発生しやすいため葉枯病防除を徹底する。
- (2) ブロッコリーは、花蕾に感染する黒すす病の防除を出蕾前までに行う。
- (3) 水田でのたまねぎ栽培は、田面から落水口まで30cm以上ある排水可能なほ場を選定し、事前に耕盤破碎や土壌の膨軟化を図るため、地下排水対策（スタブルカルチやサブソイラーの施工等）及び有機物投入を行い、土壌の膨軟化を促進させる。土壌の低pHによる低収量事例が見られることから、必要量の石灰資材を投入する。定植時には、明きよの設置及び高畦による地表排水対策も併せて行う。
- (4) たまねぎは、越冬前の葉鞘径6mm以上を確保するため、葉色が濃く充実した苗（セルトレイ育苗では葉鞘径が3～3.5mm以上）を定植する。

3 病虫害防除

降雨の日数が増え、寒暖の差が大きくなると、きゅうりうどんこ病の発生が懸念される。また、さらに気温が低下すると果菜類の灰色かび病、ねぎさび病、アスパラガス茎枯病・斑点病などの病害の発生が懸念されるため、適正に防除する。

VI 果 樹

1 か き

- (1) 収穫にあたっては着色基準を遵守する。
- (2) 表皮黒変果の発生軽減のため、着色期から反射マルチを敷設するとともに、雨天時の収穫作業は控える。また、収穫遅れは表皮黒変果の発生を助長することから、収穫後半は特に注意するとともに、果実が雨水、露等で濡れている場合は表面を乾かしてから出荷する。

2 西洋なし（ル レクチエ）

- (1) ヨードカリ反応調査等に基づき適期に収穫する。追熟は、予冷库等を活用して需要期（12月上旬）の出荷に合わせた温度管理を徹底する。
- (2) 薬剤散布を行う場合は収穫前使用日数に留意し、降雨前防除を励行する。
- (3) 必要に応じて落果防止剤を散布する。ただし、収穫前日数に注意する。

3 病虫害防除

- (1) 収穫の終了した樹種（品種）から秋季防除を実施し、病虫害の越冬密度を低下させる。
- (2) 気温の低下や降雨により、日本なし黒星病、ぶどう晩腐病、ももせん孔細菌病等の秋季感染が盛んとなるので、薬剤防除により次年度への越冬密度を下げるよう努める。
- (3) 発生が多かった病虫害は薬剤防除に加え耕種的防除を徹底し次年度の初期発生を防ぐ。

4 収穫終了後の樹体管理

- (1) 健全葉を維持し貯蔵養分を確保するため、収穫を終了した樹種（品種）から礼肥を順次施用する。ただし、凍害が発生している樹種では、耐凍性の獲得が遅延しないよう窒素の遅効きに注意する。
- (2) 収穫が終了した樹種（品種）は、長大な側枝や重なり枝を中心に秋季せん定を実施し、受光体勢の改善を図り、花芽の生育と結果枝の充実を促進する。

VII 花 き

1 ユリ切り花

- (1) 軟弱徒長による品質低下を避けるため、遮光資材の除去が遅れないよう注意する。環境の急激な変化により葉焼け等の障害が発生しやすいので、除去の際は晴天時を避ける等天候や時間帯に注意する。
- (2) 品質低下や開花遅延を避けるため、夜温が15℃を下回らないよう天候に応じた保温・加温管理を行う。
- (3) 気温の低下とともに葉枯病の発生が懸念されるので、ハウス内の換気に留意するとともに適切に薬剤防除を行う。

2 チューリップ切り花

- (1) 球根を入手後、発根部が十分に肥大していることを確認する。発根部の肥大が不十分な場合は、13℃で適宜戻し冷蔵を行う。
- (2) 定植後、地温が高いと発根障害を生じやすいので、遮光・敷きわらを行うとともに、こまめなかん水を実施して地温の低下に努める。

3 ユリ球根養成

- (1) 球根の収穫は、試し掘りを行って肥大状況を確認してから適期に行う。
- (2) 収穫した球根は、乾燥等を避けるため適度に湿らせたピートモス等で速やかにパッキングし、出荷または冷蔵開始まで作業所などの冷涼な場所または10℃前後の低温庫で保管する。

4 チューリップ球根養成

土壤伝染性ウイルス病の感染を抑えるため、地温の高い時期の定植を避け、できるかぎり平均地温が15℃を下回る10月下旬以降に定植する。ただし、天候が不安定な時期であるため、定植時期を失しないよう十分注意する。また、土壤処理薬剤は土壤全面に均一に混和する。

5 その他切り花、鉢花類

- (1) 切り花類及び鉢物類では、降雨や気温低下により灰色かび病等の病害が発生しやすくなるので、適切に薬剤防除を行うとともに、施設では換気に留意する。
- (2) ストックやケイトウでは、アブラムシの他、ハイマダラノメイガやシロオビノメイガ等のチョウ目害虫の被害が継続するので、適切に薬剤防除を行う。

VIII 畜 産

1 飼養管理

- (1) 寒暖差が大きくなることから、呼吸器病が多発しやすくなるため密飼いを避け、窓や扉、カーテン等のこまめな開閉で、畜舎内の換気及び適正な温度管理に努める。
- (2) 敷料の交換や飼槽の掃除、畜舎内の消毒等を十分に行い、衛生的な管理に努める。
- (3) 家畜に異常がある場合は早めに獣医師の診療を受ける。

2 飼料作物

- (1) 多年生牧草の最終刈り取り後には、牛ふん堆肥等を施用し、翌年の草量確保に努める。
- (2) 草地更新で牧草播種を行う際は、気温が高くとも作業を10月上旬までに終え、越冬前の初期生育に遅延が生じないように注意し、1番草収量の最大化を図る。